関西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話 (88) 2271
発行 村井 弘二
編集人
(一部 10円)

古本全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話 (08)二七五八・九番

学生商品化!
没主体的状況を間断なくうみだす
情況考察

"大学の危機"が叫ばれている新聞紙上にさわがしい、早大学館・学費闘争、明大学費闘争をはじめ、横国大、秋田大、大阪学大にみられた「教育大学・学部」への名称変更反対闘争、関学にみられた経学部新設反対闘争、同志社・中央大の学館闘争など、全国いたるところで、底辺の矛盾は小爆発を繰り返し現象化している。関大においては昨年の闘う現在的意義の不明確さの悲惨な状況を露呈した社会学部新設反対運動は、現状の意識が没主体的であり、学費値上げの動向に危惧に陥えた。

だが、このあいつぐ学園闘争は何を根底とし何を求めて表現して闘われているのであろうか。共通して流れているものは一体大学の何なのであろうか。危機の本質を探り、われわれの情況にどのようなのか、問い返してみよう。

貧困、粗末な教学、設備

関西大学の実状はどうであろうか。——誰しもが入学時に抱いていた"大学"への甘美なイメージは、まず教室にあふれるばかりの学生を前にマイク片手に一方通行の講義を続ける教官—このマスプロ教育の実際の場にぶつかって全く無展にこわれてしまう。また、休講の多い事(休講掲示板に花が咲かない日はない)。講義内容皆目体へ、あるいは教育の講義態度への不満、一般教養科目の中で、科目によって、学部によって、その内容が高校以下のものさえある。知識の切り売りをするが如く、古いノートを朗読する教官、学生の反応などまるで意に介さず、時間内だけボソボソとしゃべって退散する教官等、教官の講義能度と関連を持ってくる場合もあるが、第三時限の授業の早期切り上げ(四分の一短縮される)その他、一部に比してゼミ開講科目がないなどの、ゼミ一般に対する不満。

教学内容の貧弱さに加えて、さらに学舎の設備もお粗末極まりない。マスプロ授業でのマイク不良、校舎「般・特に大教室の設備が悪いこと、図書館とは名ばかりで、最低限必要な本さえも整っていないなど、これも数え上げればきりがない。

雑多で強烈なイメージ しかし「落穂拾い」で喪失化

以上のような環境で学ぶ、われわれのほとんどは、昼間働きながら、それぞれ何らかの目的を持って二部に学んでいる。

大学卒業の肩書き欲しさに、あるいは教員許資格、上級公務員受験資格など、四年制大学を卒業することによってある資格を得ようとして学ぶ学生、現実社会に生きるつよい男、自称前衛党の虚構に失望し、新しく自己を見い出すべく学ぶ学生、勤労学生のイメージにあこがれて、また経済的困難から一部を断念し二部に入学した学生、動機はさまざまである。だがここで注意すべきは、いわゆる"落穂拾い"である。

四十年度から、勤労学生の便宜をはかるという美名でもって、二部の入試期日を一部より遅らせることにより、一部を失敗して、三年次で一部へ編入すべく二部に入学する学生がでてきた。これにより、検定料増収、編入生の一定の増大傾向は一定程度のプール資源として確保しておく内容をもっている。数学の視点を欠いた経営主義の大学当局にとって格好の経営条件の一つになっている。一方、働きながら学ぼうと二部を志す者の門をせばめ、ひいては二部の一部への従属、学費値上げという邪悪を生みだしつつその作用は強く二部に危機状態にある。これらの入学時の動機に係わる以後の勉学形式的設主体的な意識、課度は、さきに述べた教学内容の貧弱さ、設備の不備と相関関係を保った悪循環を繰り返すことによってますます学生を自己課外の状況へ追いやっている。

いまや主体的な、自己形成の場としての大学の存在意義を失ったこの危機的諸現象は、他の大学一般に比して例外ではない。

大学の体制内化 いかに大量に産業予備軍化するか

国家独占の一銭の金も使わなくて学生を商品化し産業予備軍をつくるべくつぐ政策に大学当局が無原則に対応したものであり、マス・プロ教育—施設拡充—授業料値上げの悪循環の再生産である。それは大学の理念を喪失し、形骸化した大学と教育不在の大学がたえまなくうち続かせるのである。

大学への産業界の要請と政府(文部省)の文教政策が有機的に関連しつつ、大学の帝国主義的再編成を押しすすめてくる所に顕著にあらわれる。日本独占資本は、国際競争力をつけるべく自らの成長のために、産業経済の質的成長経済構造の近代化時代を迎えたとして大学に対して、専門的知識を備えた人材を求めてくる。

現状では日本産業の機械設備の近代化に伴う高度専門技術者養成のための自然科学系学部の大幅な増設、それに併行して、需要の減少した人文科学系学部の相対的縮少、あるいは、労務管理、事務管理要員の育成。国家の文教政策の意図に沿った教育製員の計画的集中的育成。—ここにおいて大学は、産業=資本主義の目的大学へと方向転換し、あるいは自治的形式的設主体的な意識、課度は、さきに述べた教学内容の貧弱さ、設備の不備と相関関係を保った悪循環を繰り返すことによってますます学生を自己課外の状況へ追いやっている。

いまや主体的な、自己形成の場としての大学の存在意義を失ったこの危機的諸現象は、他の大学一般に比して例外ではない。

巣立つ八百三十四名学士 3/20千里山で卒業式挙行

本学の卒業式はさる三月二十日(月)千里山学舎体育館において午前十時から、経・商学部(一、二部)と工学部、午後一時から法・文学部(一、二部)の二回にわけて挙行された。二部の卒業者総数は、去年は六百一十五名であったが、卒業予定者約千二百名中本年は八百三十四名で増大している。

▽文学部
英文 三六
国文 一七
哲学 六
仏文 四
独文 二
史学 三
心理 二
新聞 一三
東洋 二
▽経済学部 二五
▽商学部 一六七
▽法学部 二六
▽法律 二五
政治 七
五 一四
二部 一五
一部 七六六
二三五 五二
三一 二
一二 三
一三 一
九〇
一八七 七
七八六
六〇四

入学者千百七十九名 三・九倍の競争率

一部入試は三月十一日(日)千里山学舎で行なわれた。今年は社会学部新設で去年同時三千三百八十二名に対して本年は三千九百五十二名の予定である。合格発表は十九日午後一時から天六学舎で行なわれた。合格者総数千三百七十九名の入学者総数千三百七十四名で本年度の入学者総数千三百七十九名の予定である。内容詳細は別表のとおり。本年も入学者の全般的傾向は未就職の学生が増大している。

有隣館に会議室増設

現在工事中の有隣館は、三階に新しく北側に会議室室、南側に応接室一室が増設される。この会議室はデコーディオン式の壁で仕切られ、ためには一室として使えるようになっており、音響効果もいく分配慮されている。なお完成は五月中旬の予定である。

新入社員募集

ジャーナリスティックな方、大学新聞の製作に興味と関心を抱いている方はふるってご応募下さい。

大学の死滅化現象に関大に日々起こりその問題を提起しつつも、現実社会の矛盾の動向へ、疎外された現実に、現実に埋没する姿勢をもって遊ぶことなく鋭くアピールしていく姿勢をもちつつ、われわれの関西大学新聞は生まれていく。

現実に埋没した歴史の古さでなく、現実へのアプローチ活動の業績を!

各学部一、二年生経験の有無は問いません。

地下BOX街

昭和42年度入学者資料

(学務課調べ)

学部		募集人員	志願者数	合格者数	手続者数	合格点 最高	合格点 最低	全平均点	編入学 志願者	編入学 合格者	競争率
2部	法	300	1,298	439	379	392	253	228.4	49	34	4.0
	文	150	612	204	180	406	228	212.0	50	27	4.0
	経	300	1,038	439	367	353	210	215.5	20	8	3.4
	商	150	667	221	190	363	210	205.5	18	6	4.4
	社	100	336	71	63	315	235	200.5	一	一	3.9
	計	1,000	3,951	1,374	1,179			212.4	137	75	
1部	法	500	7,720	1,210	853	425	320	263.9	64	24	6.3
	文	400	6,233	1,038	700	460	310	245.8	79	28	5.9
	経	500	9,962	1,454	792	399	275	221.0	89	31	6.7
	商	500	9,683	1,284	678	430	297	236.7	57	13	7.5
	社	400	8,429	1,257	786	375	246	195.3	一	一	6.6
	工	400	6,950	1,756	集計中	電子 473	金属 264	一	10	6	3.9

学内告知板

(学生課)

◆定期健康診断実施について
昭和四十二年度春期定期健康診断を次の日程で実施するから必ず受診のこと。
検診日5月15日～20日(男子)
5月22日・23日(女子)
場所 体育館第二診療所
なお、学部別検診日程、時間など詳細は後日掲示する。

◆奨学金説明会について
日本育英会、関西大学、その他地方奨学金募集の説明会を下記の通り行うから、希望者は出席して下さい。
日時 4月13日午後7時半
場所 三〇一号教室

◆四十二年度アルバイト登録と斡旋について
1、アルバイト登録
登録用紙配布4月1日から随時
登録用紙受付 4月1日から六時～八時
なお一度登録すれば在学中有効です。
2、アルバイト斡旋
時間は午後六時～八時で、時間外は一切受付けない。

学声春秋

「出席の回数を重要視する」との形式主義が公然と濫歩している。《奇妙なるもの》何ものなるやと後を追いかけたい衝動に駆られはしないか。主体的活動として授業に参加するのを「出席の回数の重要視」という外圧的に規制してしまっている。出席なるもの大学からマスプロ的に労働力の効率のよい労働者をトコロテン式に生産する点検である▼ある教授、理事たちは出席をとることを浅はかに「出席をとらなければ大学にわざわざきて出席しているものが可哀想ではないか」と。冗談もやすみやすみにいえ! われらは大学にきているのは出席をとられにきているのではない。そんな意味ないものに身をまかせるため主体的活動を規制されるために一切の生活を切りつめて《大学の場》を求めて集合しているのであろうか。筆者は問いたい▼大学を企業に位置付けた経営者、専門屋たちは根源的なものを忘却の彼方に忘れ去っているのであり、われらと真の対話関係が断層、亀裂にあるのは必然的状況ではないだろうか▼大学を企業に位置付けしたことによってマス・プロ教育の拡大があっても趨勢としては縮小の方向はとりえないのだ。この状態を"疎外"をもってもて遊ぶという危険な状態を呈している。大学の生命たる密度の論理をぬきにしてマス・プロ生産点検へ根源的なものに接することなく狂舞するため余計疲労してしまい意識に落ちいってしまい無味乾燥の危険な邪悪を呈しても意識している▼教室とは個々の点なった個性が教授に対してより明確化し、再生産作業の一つの《場》であって、教室におらなくても主体的に大学の《場》—《思想》的根拠においた連帯がそこになければならないのだ▼出席回数といった形式的、外圧的規制によって主体を縛る時無力感におおわれる。そして関大のエトースの根源的分裂した現在にとって、八十年の歴史を検証せずに八十周年記念で取り繕うことは不可能であった▼こういった状況下にあって全国の学友と手を結んで反動攻勢と闘い民主化を起こすのだという意識が、こんな痛なものだろうか。主体を喪失したところから民青系全学連の傘下にはいることによる民主化は幻想にしかすぎず大衆状況をそのままとうえ追認してしまい、また日共の下部団体として護会主義の消化過程下に転落してしまう。主体的に大学の(ﾏﾏ)—《思想》的根拠においた連帯から創造的なものへの根源的作業化ではない。亀裂を拡大する補完物ではなかろうか▼五月危機は大学のエトースの分裂が根底にあり、これへ対応し、これへの打破への志向を語られねばならない。

三面は各パート用で雑は学友会執行部に渡くだけで自由に使用できることになっている。

学生課は、一階「〇六、一〇七号教室の横の曲り角の壁に各クラブが各自掲示ビラをはっているところを整備して掲示用の板壁を作り、学内を美しくするというもとになし崩し的に掲示、ビラ規制を行なう動向であろう。

学内告知板

「幻想」の中で"仮面"を覆いこの矛盾の山積に埋没している。故岩崎学長は「学びつつ働く学徒に寄する」において「昼間の大部分を勤労学生の将場で費し、夜間にたけ大学の教室に、図書館に、研究室に通ったとしても、その精神において完全に学生であり俸給生活者ではない。—単に各自の求むる講義ない頭書の時間を夜間に割りあてられたもののうちに選んだのに他ならぬ—。夜間授業を選んだ学生の一人ひとりが『働きながら学ぶ』というサラリーマン的な観念から『学びながら働く』という真の学生精神に飛躍し、かつこれに帰することである」(原文のまま)と、二部学生に語りかけた。だが、時の流れに、大学の大衆化へ身をまかせた岩崎当局は企業性重視の観点から、一部工場を山工場をより有効に運営するための補完物として二部を位置づけた。

二部の千里山移転当局は、教育工場関西大学の経営をより完璧にするための合理化方針以外の何ものでもない。

こういう関大の現状のもとに精を費くわれわれは、一定単位を修得すれば、関西大学卒業のレッテルを貼った学士様という商品として、あたかもオートメーション工場のベルトコンベアから流れ出る完成品のごとく、虚偽、擬制の社会へ送り出されるのである。

掲示板新設 掲示ビラ規制の動き?

学校当局は校門付近に掲示板を新設した。二面は社会学部用に、

関西大学校友会
会長 大槻信
副会長 寒武
同 島喜
同 川睦
総務部長 村龍
事業部長 本
広報部長 藤令
組織部長 寺
財務部長 坂
監事 田
同 西
同 下
代議員会議長 中
同 谷
副議員長 安
同 金
朝敬宗鶴小辰市
一作一蔵郎典武允勇夫鴻一夫雄
本富口川寺下西田村本村川島本
泰貞藤友寛治清衛直重康太忠
治次三
雄寛郎由郎一郎一士夫正兼郎雄

祝 四十二年度 入学

関西大学理事会
理事長 久
学長・理事 森
理事 今
同 植
同 上
同 岡
同 中
同 西
同 西
同 藤
同 松
同 梅
常任監事 小
同 戸
根寺原原田本村石野道田井川井

株式会社 竹中工務店
取締役社長 竹中錬一
本店 大阪市東区本町四丁目二七
電話 大阪 (252) 1201番 大代表
営業所 札幌・仙台・東京・横浜・静岡・名古屋・富山
京都・神戸・岡山・広島・高松・福岡・北九州

論説

本来の自治活動を
全般的危機に闘う 主体的活動の創造を

(I)

国家独占資本主義的"高度成長"と"繁栄"は、労働者大衆が民主々義を語ることのできない形骸化した議会民主々義体制への内花化の現象を呈した。しかし戦後日本資本主義の一直線的"繁栄"の崩壊による暗影は、生活危機を必然的に顕在化させている。一方日本政府、支配階級の政治的挑戦と階級攻勢の根底的動向に対して、形骸化議会民主々義に"議会主義の擁護"のスローガンを掲げ「民主」統一戦線を提唱するといった極めて政治主義的社会、共産党は、現実の大衆と支配者との決定的断層を深化する形で、彼ら自体の総括さえも大衆的に行なえなかった。物価攻勢の経済的危機状況とともに政治的危機を増大せずにおれなく、形骸化した自称既成「前衛」政党をもってしても満足しえない日本資本主義の客観的現在の状況と主観的われわれ情況の関係から現実の危機を顕在化しなければならないとこころ。

この危機の現実の状況下における大学は、帝国主義の支配体制としての、学生育治機の剥奪の方向と、「大学法」「教発法」の改悪と教育内容の産学協同化の方向をとり、大学の基底たる"変革"を無意味化し、"疎外"におきかえられた。これは政府・文部省による教育制度内容の全般的改編と産業体制への従属としての変化は、社会学部、教育学科設立動向に象徴される。科学技術の分野の導入と勤務管理者養成などの大量職業養成化としてのマスプロ大衆化は現代社会の根源的矛盾と不可欠に結びついている。労働力の商品の効率を強化する準備過程としての大学を位置づける産業予備軍化と、日常の双翼者的被害者的意識の累積を"疎外"にすりかえ、あるいはニヒリズムに無意識に溺れる学生の大衆化としての情況である。これは主体性の回復への意向を大学の企業規模の拡大をもって遊離した姿である。

さらに財政負担の全面的な学生への転化に対し切りつめられた生活に耐えながら「学問」をしようとするが、関大二部における生活権の防衛の主体的な組織が皆無であることは、この危機状況に放置されこのままでは経済的窮乏化、破綻化である。

さらに私学の財政的危機の解決として提起してくる学費値上げを私学経営の破綻、矛盾→国家の文教政策の破綻・矛盾→私学への国庫補助金の要求という論理では語ることはできず、私学の経営を根面から補完することに帰着すべきである。

生活権を侵害するこの学費値上げ問題は私学運営の基本的あり方に問題があり、根源的矛盾から発生する象徴的表現である。

大学当局基本の動向と私学の財政的危機は同一線的"繁栄"の情況と軌を一にした経営主義的確立を眺した私学は、自給自足的独立採算方式の破産を現出させるとともに、土地買収、建設設備一固定資産への大巾な投資を銀行資本の導入を"負債"として赤字として計上し、大学の規模を拡大化しながらも"負債"の唯一の解決として学費値上げのラセン的運動の現象である。

われわれはこの危機をヒシヒシと感じておりながらこれに対決する有効な組織を主体的に組織化するに至っていない。昨年本学における経営主義と現代資本主義の動向に敏速に反応し提起した社会学部、教育学科らの新設に対して何をなすべきかという問題意識的に運動を実体化する方向をとるのでなく環境整備要求あるいは軍国主義化反対民青系全学連に拡散された。この深刻的危険的状態を考察しなければならない。

現在の学園生活そのものの矛盾はパート抗争なる現象そのものでなく、高額な学費「学費値上げ」「佐伯食堂値上げ」動向の経済的弾圧は、われわれの日常生活に安定性を失わせる一方教育環境の放置、カリキュラムの偏狭さ「落穂拾い化」現象化の中で一部との格差増大という学校当局の態度などによって危機感は深く増大していることである。

〈Ⅲ〉

現在焦眉な総点は大学権力の根源にまで至り、われわれの生活の防衛と権利をソ脅威としての運動をいかに展開しえるかということである。

ところが自称「前衛」を自認する民青—「少促」は、帝国主義に従属する日本の軍国主義に対して、小ブル的「民主」統一戦線ばかりに、環境整備を要求し改良主義的虚飾を定着化させる方向をとっている。

三十九年学費闘争において大学権力との対決の中で民青は「米帝国主義に従属する国家権力に対し、学費闘争を挑め」と超セクト的大国綱統一戦線をいった時、大学権力と手を結んでしまったという平実を記憶の深部にきざみこまねばならない。これは日共の反米民族民主統一戦線の政治方針であり、併行しての種々の身のまわり、方針—文化・スポーツ祭典、青年友好祭、便所トイレットペーパー、うたごえ—と、民青系全学連の下部、消化団体化の位置付けである。それゆえ批判に徹底民主主義的に対処し、常に地ずり的大量脱党現象を呈する日共党に押し進まなければならない。

日本資本主義が世界資本主義に確固たる姿を現わしたこの変質過程の現実に対して、日共綱領—反米民族統一主義—はこの現実を回避する。

一方日本の支配階級の新たな形成とそれに対する労働者階級闘争をアメリカ帝国主義独占論で解消するという労働者階級の主体性をカフル的「民主」民族統一戦線に解消させ、それが「議会主義」「自主独立」「平和と民主主義」である。血のテルミドールのスターリンを批判せずにこの階級の没主体性を「特定のイデオロギー」を学生に押しつける」ことを政治主義と批判することによって自己の無定見をさらしている。さらに変革なき秩序の「民主」という虚飾の幻影のもとに政治的引き回しがなされている。そして"安保"闘争に必然的に同じ、ものが必然的にうける主大の深さの現実に「民主化」の名で平民学連は安保とその以降の闘った学生運動の分裂現象を「トロツキスト=暴力団」反共カンパニアと犯罪的捏造を行ないつつセクト的固定化を企っている。

物価攻勢の状況下、高額な学費と、学園生活危機の拡大化の現実に、現実の根源的矛盾の社会の止揚の志向を喪失したうえに、青年友好祭などが必要といえるであろうか。

(Ⅳ)

本学二部学友会は安保以降激流に反動化のなか六一年以降徹底的な大学当局の反動化工作と長年の積弊の蓄積の急増のなか、学生運動は強力に縮少化され、それゆえ疲度にわたる学費値上げ問題は帝に学生弾圧のもとに後退を重ね、大学経営の好調化され、権利の喪失、生活の危機化させている。

六一年の自治選における選管のデタラメに対して大阪地裁に仮処分申請をする邪悪を呈しており、その年学費値上げが強行された。それ以後毎年不正問題暴力事件が頻発しており、暴力事件の加害者は帝に体育会系所属の学生であったということは《何を意味するか》根底的に切開しなければならない。さらに38年学費闘争においては体育会を中心とする二数分子の内部機乱し、闘争防害により後退を重ねた。次第に雰囲気微底的に反動化、反民主化する学内情況は、学友会諸君は生活に直接ひびく佐伯食堂料金値上げを大衆化する前に政治的ボス交によって粉砕した。

食堂の特殊利益化と前近代的な経営、経理の不明化は学園生活の原生生活の貧困の一つを象徴したそして何時爆発起の機をうかがっている。

合理化のもとに千里山移転の動向もうかがえる歴史と現実との亀裂の深さ六八年を位置付けることなく大学当局と一握りの学友会関係者のみ八十周年記念ムードに酔い小規模的な祭り騒きを行なった。

このような状況下にわれわれ二部勤労学生の人現状にとっていま必要なのは所属の▽という問題意識から現代社会の矛盾の根底的な、没主体的な客観主義にとらえるのではなくて、われわれの生活と権利を防衛するとともに真の自治選に基づいた、われら自からの学友会を別将する方向をとる以外何ら期待できえない。早やまることはない怖れることはないのだ。

新報に対する卑劣極まる民青二部の中傷を弾劾する

学生闘争の方向はあくまで学校経理の改善としてわれわれの前にうちだしてくる学校権力との対決以外なにものでもない。まさしく学校権力である。学生を商品化し学生取奪する学校権力への闘争以外にない。このことを民青は、反米民族主義的に歪曲し、学生を商品化し学生取奪する学校権力者として反学生的、保守的な学友会諸君ともども"国庫補助要請"にゆうこうというのだ。まさしく前衛の破綻であって何であろうか。だから民青は、現実を歪曲し、学生の"敵"学校権力者として反学生的、保守的な学友会諸君ともども"国庫補助要請"にゆうこうというのだ。まさしく前衛の破綻であって何であろうか。だから民青は、現実を歪曲し、学生の"敵"学校権無根な中傷を千神国夫氏におびせ、最後まで闘かったと自己の正当性を宣伝する。問題はこの民青の運動総括である。

民青は、事実を歪曲し、闘争の取北を千神国夫氏一人においかぶせ、デタラメな卑劣な偽人攻撃を、中傷をあびせ、新報社を中傷し、民青のデタラメな、破綻を、除棄するという卑怯な態度を示している。民青の攻撃はなんの事実関係からも遊びきたされない。闘争の組織的崩解を阻止し、建て直そうとした千神国夫の遭遇したものは民青の卑劣な、クレソン極まる中傷、吹聴し、闘争の劣勢を千神国夫に自己の破綻を転嫁し、反米民族主義に後退し、学友会長主花として不可欠の要素、学生の分断政策を反動的な体育会カンパニアと犯罪的捏造を行ないつつセクト的固定化を企っている。

物価攻勢の状況下、高額な学費と、学園生活危機の拡大化の現実に、現実の根源的矛盾の社会の止揚の志向を喪失したうえに、青年友好祭などが必要といえるであろうか。

本学二部学友会は安保以降激流に反動化のなかで六一年以降徹底的な大学当局の反動化工作と長年の積弊の蓄積の急増のなか、学生運動は強力に縮少化され、それゆえ疲度にわたる学費値上げ問題の右翼的動向に象徴される。科学技術の分野の導入と勤務管理者養成などの大量職業養成化としてのマスプロ大衆化は現代社会の根源的矛盾と不可欠に結びついている。労働力の商品の効率を強化する準備過程としての大学を位置づける産業予備軍化と、日常の双翼者的被害者的意識の累積を"疎外"にすりかえ、あるいはニヒリズムに無意識に溺れる学生の大衆化としての情況である。これは主体性の回復への意向を大学の企業規模の拡大をもって遊離した姿である。

さらに財政負担の全面的な学生への転化に対し切りつめられた生活に耐えながら「学問」をしようとするが、関大二部における生活権の防衛の主体的な組織が皆無であることは、この危機状況に放置されこのままでは経済的窮乏化、破綻化である。

さらに私学の財政的危機の解決として提起してくる学費値上げを私学経営の破綻、矛盾→国家の文教政策の破綻・矛盾→私学への国庫補助金の要求という論理では語ることはできず、私学の経営を根面から補完することに帰着すべきである。

生活権を侵害するこの学費値上げ問題は私学運営の基本的あり方に問題があり、根源的矛盾から発生する象徴的表現である。

大学当局基本の動向と私学の財政的危機は同一線的"繁栄"の情況と軌を一にした経営主義的確立を眺した私学は、自給自足的独立採算方式の破産を現出させるとともに、土地買収、建設設備一固定資産への大巾な投資を銀行資本の導入を"負債"として赤字として計上し、大学の規模を拡大化しながらも"負債"の唯一の解決として学費値上げのラセン的運動の現象である。

われわれはこの危機をヒシヒシと感じておりながらこれに対決する有効な組織を主体的に組織化するに至っていない。昨年本学における経営主義と現代資本主義の動向に敏速に反応し提起した社会学部、教育学科らの新設に対して何をなすべきかという問題意識的に運動を実体化する方向をとるのでなく環境整備要求あるいは軍国主義化反対民青系全学連に拡散された。この深刻的危険的状態を考察しなければならない。

現在の学園生活そのものの矛盾はパート抗争なる現象そのものでなく、高額な学費「学費値上げ」「佐伯食堂値上げ」動向の経済的弾圧は、われわれの日常生活に安定性を失わせる一方教育環境の放置、カリキュラムの偏狭さ「落穂拾い化」現象化の中で一部との格差増大という学校当局の態度などによって危機感は深く増大していることである。

〈Ⅲ〉

現在焦眉な総点は大学権力の根源にまで至り、われわれの生活の防衛と権利をソ脅威としての運動をいかに展開しえるかということである。

ところが自称「前衛」を自認する民青—「少促」は、帝国主義に従属する日本の軍国主義に対して、小ブル的「民主」統一戦線ばかりに、環境整備を要求し改良主義的虚飾を定着化させる方向をとっている。

三十九年学費闘争において大学権力との対決の中で民青は「米帝国主義に従属する国家権力に対し、学費闘争を挑め」と超セクト的大国綱統一戦線をいった時、大学権力と手を結んでしまったという平実を記憶の深部にきざみこまねばならない。これは日共の反米民族民主統一戦線の政治方針であり、併行しての種々の身のまわり、方針—文化・スポーツ祭典、青年友好祭、便所トイレットペーパー、うたごえ—と、民青系全学連の下部、消化団体化の位置付けである。それゆえ批判に徹底民主主義的に対処し、常に地ずり的大量脱党現象を呈する日共党に押し進まなければならない。

日本資本主義が世界資本主義に確固たる姿を現わしたこの変質過程の現実に対して、日共綱領—反米民族統一主義—はこの現実を回避する。

一方日本の支配階級の新たな形成とそれに対する労働者階級闘争をアメリカ帝国主義独占論で解消するという労働者階級の主体性をカフル的「民主」民族統一戦線に解消させ、それが「議会主義」「自主独立」「平和と民主主義」である。血のテルミドールのスターリンを批判せずにこの階級の没主体性を「特定のイデオロギー」を学生に押しつける」ことを政治主義と批判することによって自己の無定見をさらしている。さらに変革なき秩序の「民主」という虚飾の幻影のもとに政治的引き回しがなされている。そして"安保"闘争に必然的に同じ、ものが必然的にうける主大の深さの現実に「民主化」の名で平民学連は安保とその以降の闘った学生運動の分裂現象を「トロツキスト=暴力団」反共カンパニアと犯罪的捏造を行ないつつセクト的固定化を企っている。

物価攻勢の状況下、高額な学費と、学園生活危機の拡大化の現実に、現実の根源的矛盾の社会の止揚の志向を喪失したうえに、青年友好祭などが必要といえるであろうか。

本学二部学友会は安保以降激流に反動化のなかで六一年以降徹底的な大学当局の反動化工作と長年の積弊の蓄積の急増のなか、学生運動は強力に縮少化され、それゆえ疲度にわたる学費値上げ問題の右翼的動向に象徴される。科学技術の分野の導入と勤務管理者養成などの大量職業養成化としてのマスプロ大衆化は現代社会の根源的矛盾と不可欠に結びついている。労働力の商品の効率を強化する準備過程としての大学を位置づける産業予備軍化と、日常の双翼者的被害者的意識の累積を"疎外"にすりかえ、あるいはニヒリズムに無意識に溺れる学生の大衆化としての情況である。これは主体性の回復への意向を大学の企業規模の拡大をもって遊離した姿である。

さらに財政負担の全面的な学生への転化に対し切りつめられた生活に耐えながら「学問」をしようとするが、関大二部における生活権の防衛の主体的な組織が皆無であることは、この危機状況に放置されこのままでは経済的窮乏化、破綻化である。

さらに私学の財政的危機の解決として提起してくる学費値上げを私学経営の破綻、矛盾→国家の文教政策の破綻・矛盾→私学への国庫補助金の要求という論理では語ることはできず、私学の経営を根面から補完することに帰着すべきである。

生活権を侵害するこの学費値上げ問題は私学運営の基本的あり方に問題があり、根源的矛盾から発生する象徴的表現である。

大学当局基本の動向と私学の財政的危機は同一線的"繁栄"の情況と軌を一にした経営主義的確立を眺した私学は、自給自足的独立採算方式の破産を現出させるとともに、土地買収、建設設備一固定資産への大巾な投資を銀行資本の導入を"負債"として赤字として計上し、大学の規模を拡大化しながらも"負債"の唯一の解決として学費値上げのラセン的運動の現象である。

われわれはこの危機をヒシヒシと感じておりながらこれに対決する有効な組織を主体的に組織化するに至っていない。昨年本学における経営主義と現代資本主義の動向に敏速に反応し提起した社会学部、教育学科らの新設に対して何をなすべきかという問題意識的に運動を実体化する方向をとるのでなく環境整備要求あるいは軍国主義化反対民青系全学連に拡散された。この深刻的危険的状態を考察しなければならない。

現在の学園生活そのものの矛盾はパート抗争なる現象そのものでなく、高額な学費「学費値上げ」「佐伯食堂値上げ」動向の経済的弾圧は、われわれの日常生活に安定性を失わせる一方教育環境の放置、カリキュラムの偏狭さ「落穂拾い化」現象化の中で一部との格差増大という学校当局の態度などによって危機感は深く増大していることである。

〈Ⅲ〉

現在焦眉な総点は大学権力の根源にまで至り、われわれの生活の防衛と権利をソ脅威としての運動をいかに展開しえるかということである。

ところが自称「前衛」を自認する民青—「少促」は、帝国主義に従属する日本の軍国主義に対して、小ブル的「民主」統一戦線ばかりに、環境整備を要求し改良主義的虚飾を定着化させる方向をとっている。

三十九年学費闘争において大学権力との対決の中で民青は「米帝国主義に従属する国家権力に対し、学費闘争を挑め」と超セクト的大国綱統一戦線をいった時、大学権力と手を結んでしまったという平実を記憶の深部にきざみこまねばならない。これは日共の反米民族民主統一戦線の政治方針であり、併行しての種々の身のまわり、方針—文化・スポーツ祭典、青年友好祭、便所トイレットペーパー、うたごえ—と、民青系全学連の下部、消化団体化の位置付けである。それゆえ批判に徹底民主主義的に対処し、常に地ずり的大量脱党現象を呈する日共党に押し進まなければならない。

日本資本主義が世界資本主義に確固たる姿を現わしたこの変質過程の現実に対して、日共綱領—反米民族統一主義—はこの現実を回避する。

一方日本の支配階級の新たな形成とそれに対する労働者階級闘争をアメリカ帝国主義独占論で解消するという労働者階級の主体性をカフル的「民主」民族統一戦線に解消させ、それが「議会主義」「自主独立」「平和と民主主義」である。血のテルミドールのスターリンを批判せずにこの階級の没主体性を「特定のイデオロギー」を学生に押しつける」ことを政治主義と批判することによって自己の無定見をさらしている。さらに変革なき秩序の「民主」という虚飾の幻影のもとに政治的引き回しがなされている。そして"安保"闘争に必然的に同じ、ものが必然的にうける主大の深さの現実に「民主化」の名で平民学連は安保とその以降の闘った学生運動の分裂現象を「トロツキスト=暴力団」反共カンパニアと犯罪的捏造を行ないつつセクト的固定化を企っている。

物価攻勢の状況下、高額な学費と、学園生活危機の拡大化の現実に、現実の根源的矛盾の社会の止揚の志向を喪失したうえに、青年友好祭などが必要といえるであろうか。

本学二部学友会は安保以降激流に反動化のなかで六一年以降徹底的な大学当局の反動化工作と長年の積弊の蓄積の急増のなか、学生運動は強力に縮少化され、それゆえ疲度にわたる学費値上げ問題の右翼的動向に象徴される。科学技術の分野の導入と勤務管理者養成などの大量職業養成化としてのマスプロ大衆化は現代社会の根源的矛盾と不可欠に結びついている。労働力の商品の効率を強化する準備過程としての大学を位置づける産業予備軍化と、日常の双翼者的被害者的意識の累積を"疎外"にすりかえ、あるいはニヒリズムに無意識に溺れる学生の大衆化としての情況である。これは主体性の回復への意向を大学の企業規模の拡大をもって遊離した姿である。

さらに財政負担の全面的な学生への転化に対し切りつめられた生活に耐えながら「学問」をしようとするが、関大二部における生活権の防衛の主体的な組織が皆無であることは、この危機状況に放置されこのままでは経済的窮乏化、破綻化である。

さらに私学の財政的危機の解決として提起してくる学費値上げを私学経営の破綻、矛盾→国家の文教政策の破綻・矛盾→私学への国庫補助金の要求という論理では語ることはできず、私学の経営を根面から補完することに帰着すべきである。

生活権を侵害するこの学費値上げ問題は私学運営の基本的あり方に問題があり、根源的矛盾から発生する象徴的表現である。

大学当局基本の動向と私学の財政的危機は同一線的"繁栄"の情況と軌を一にした経営主義的確立を眺した私学は、自給自足的独立採算方式の破産を現出させるとともに、土地買収、建設設備一固定資産への大巾な投資を銀行資本の導入を"負債"として赤字として計上し、大学の規模を拡大化しながらも"負債"の唯一の解決として学費値上げのラセン的運動の現象である。

われわれはこの危機をヒシヒシと感じておりながらこれに対決する有効な組織を主体的に組織化するに至っていない。昨年本学における経営主義と現代資本主義の動向に敏速に反応し提起した社会学部、教育学科らの新設に対して何をなすべきかという問題意識的に運動を実体化する方向をとるのでなく環境整備要求あるいは軍国主義化反対民青系全学連に拡散された。この深刻的危険的状態を考察しなければならない。

現在の学園生活そのものの矛盾はパート抗争なる現象そのものでなく、高額な学費「学費値上げ」「佐伯食堂値上げ」動向の経済的弾圧は、われわれの日常生活に安定性を失わせる一方教育環境の放置、カリキュラムの偏狭さ「落穂拾い化」現象化の中で一部との格差増大という学校当局の態度などによって危機感は深く増大していることである。

〈Ⅲ〉

現在焦眉な総点は大学権力の根源にまで至り、われわれの生活の防衛と権利をソ脅威としての運動をいかに展開しえるかということである。

ところが自称「前衛」を自認する民青—「少促」は、帝国主義に従属する日本の軍国主義に対して、小ブル的「民主」統一戦線ばかりに、環境整備を要求し改良主義的虚飾を定着化させる方向をとっている。

三十九年学費闘争において大学権力との対決の中で民青は「米帝国主義に従属する国家権力に対し、学費闘争を挑め」と超セクト的大国綱統一戦線をいった時、大学権力と手を結んでしまったという平実を記憶の深部にきざみこまねばならない。これは日共の反米民族民主統一戦線の政治方針であり、併行しての種々の身のまわり、方針—文化・スポーツ祭典、青年友好祭、便所トイレットペーパー、うたごえ—と、民青系全学連の下部、消化団体化の位置付けである。それゆえ批判に徹底民主主義的に対処し、常に地ずり的大量脱党現象を呈する日共党に押し進まなければならない。

日本資本主義が世界資本主義に確固たる姿を現わしたこの変質過程の現実に対して、日共綱領—反米民族統一主義—はこの現実を回避する。

一方日本の支配階級の新たな形成とそれに対する労働者階級闘争をアメリカ帝国主義独占論で解消するという労働者階級の主体性をカフル的「民主」民族統一戦線に解消させ、それが「議会主義」「自主独立」「平和と民主主義」である。血のテルミドールのスターリンを批

ベトナム反戦への視点（5）

終焉する他律的反戦論理

既成平和擁護運動―一国的平和的解決の支持

幻影と現実の鋭い亀裂

ベトナム戦争と平和運動

ベトナム戦争は、底なしの泥沼へ深まりゆく危機を一途に激化している。二月に朝鮮戦争の四倍の爆撃を行なう米軍、さらに政府軍、韓国、オーストラリア、フィリピン、タイ軍の連合軍は焦土化した硝煙けむるベトナムに殺戮を求めている。北ベトナムとベトコンは兵員と近代兵器の増強を行いつつ、"対決および勝利"より"全般的なゲリラ戦"への転換と新たな局面へ胎動している。

平和日本は幻想にしかすぎなかった。戦後日本資本主義の一翼した東南アジア進出は"強力的"日韓以降公然化しており「自主主義路線」営の一員の侵略遂行のもと日本政府・支配階級のベトナム戦争介入と軍事力増強の現実はすそ広がりの暗影を投射し、いやおうなしに危機に直面させられる自己は、無意識的に無力感、ニヒリズムにさらされる危機をうみだしている。「自分には直接関係ない」「誰かがどうにかする」と自分を欺瞞させる一方「ベトナムはベトナム人の中で」「ジュネーブ会議あるいは国際会議の開催」の支援に賛成するという自己の危機意識を圧殺し、没主体的な状況を突破する論理をもたず、他律的なものに委ねている。閉塞感、危機意識を無視し止揚を志向せずに無為なものに身を委ねる現実に対して私たちはこの現実をベネ化してベトナム反戦の方向性を創造的につくりだしていかなければならない。

日本労働者の10・21スト、日本史上初の反戦ストと宣伝のなかでこの他律的反戦は敗北的終焉をみせた。以降社共の形骸化した議会主義擁護に圧されるという現実は、現実体制を突破する運動は後退している。

深まりゆく軍事・緊張政策の対立

擬似平和提唱

北ベトナムの大規模な"侵入"、中ソの大型兵器の北ベトナムへの増強―ミグ戦闘機を含む近代兵器―支援―ベトコン（南ベトナム民族解放戦線）の戦力は、巨大な戦闘能力を擁する米軍の強力な攻勢に対して一定の均衡を保ちつづけており、北爆に対して北ベトナムは近代兵器を盾にしている。南ベトナムにおける反「共」民政移管要求の仏教徒運動を武力的に徹底的に圧殺した以降、極「反共」の民政移管を急ぐ米国、南ベトナム政府に対してベトコンはゲリラ戦をもって対処している。

北爆、空爆、地上軍攻勢のエスカレーションの強化はなおく虚偽を「事実化」させ米軍の死にものぐるいの戦闘と中ソの強力な兵器支援によるベトコン・北ベトナムの戦力増強はそれが毎日苛酷に悪惨に殺戮と破壊はベトナムの焦土に死と化してゆくベトナム戦争の現実の危機の一つを象徴的な暗影である。

中国革命路線の適用としての後進国における反米帝の民族民主革命闘争を物質化する北ベトナム、ベトコンによって闘かわれている。五分の四あるいは四分の三の地域に支配力をもつベトコンに対して「侵略に対する正義の闘い」支援と、世界資本主義体制維持による反共政策として「南ベトナム国民が侵略に対抗し、その独立を維持する」ために米軍の直接的軍事介入、ダナン基地を拠点とする米軍拡張派のもとに《ベトナム戦争》がある。アメリカの泥沼戦争政策と中国核実験に象徴される共産圏の軍事的対抗が形づくっている。「米中対決」必至状況が中国文化大革命の中でベトナム戦争そのものの固着化と泥沼化を深めるとともに、米中の緊張化は国際的に反映している。

フランス帝国主義は「東南アジア中立化構想」を掲げベトナム和平への介入政策であり、日本においては政府・支配階級にゆられる「厳しい国際情勢に対処する」として、国防体制強化としての第三次防衛計画、「アジアの平和」の義務と称した原子力潜水艦につぐ原子力空母エンタープライズ号の寄港への状況である。

南ベトナムグエン・カオ・ケ軍事政権は、一方におけるベトコンのゲリラ戦を主軸とした抵抗と他一方に国民の厭戦意識の昂揚下において、デタラメな選挙にもとづく政府としての「合法性」をまきちらし、国内の厭戦意識、戦争反対運動に武力的壊滅的軍事力を行使することによって「公的権力」の定着化をはかり、ジョンソン大統領は「文官の配置による民政の安定」と呼応し、米軍の大量の投入と残虐な軍事政策の施行を迫まり反共体制確立を挑している。

アメリカの深刻な経済不況の前ぶれと国内の新左翼勢力を中心とする平和運動の昂揚に対し「共産側」に対する強力な軍事圧力のもと兵力六十万を動員し、侵略政策を画策している。不気味な政治的経済的矛盾の拡大を内包しながらベトナム戦争の泥沼化と世論操作の「和平会議」の提唱の繰りかえしである。ソ連は「平和共存」論のもとに軍事物資援助を対抗させるというアメリカのベトナム侵略への軍事的対抗政策としてうち出されている。そしてジョンソン大統領の「無条件和平交渉の意志がある」という言明から、ウ・タント国連事務総長の「停戦・会議」さらにソ連、仏、英の「和平提案」種々の色あいを盛りこむ世界各国の「平和を望む声」は、「和平交渉」を提唱し繰りかえすのみである。

ベトナム戦争の泥沼化が深まり各国の緊急政策とともに相集的に危機の深刻化の中にあってテーブル―和平交渉―につかせることによってそれは一抹の生理的安堵以上のものとはいえず、反戦闘争の方向性へ開示されるものではない。

中国の現段階は歴史的に一定の岐路に立たされている。それは中国の内部的状況としてばかりでなくこれと外部的要因との密接な関係である。一九四九年の中国革命の性格―多々にしてニヒリズムにさらされる危機意識を志向するナロードニキ毛沢東主義と農民軍隊を主軸にし、民族ブルジョアジーを含めた民族民主統一戦線を実体とする沒階級的止揚するものの不明確没主体的スターリニズムであり、現在の権力闘争を新たに進行する局面はこのスターリニズムの第二革命への歴史的実験である。

毛体制過程の整風運動

中国における文化大革命は、社会的矛盾の拡大、中国の政治経済機構の深刻な混乱、停滞状態に対して一月中旬から闘争清算がなされた。これは文化大革命の"序幕"である。

中国においては一九四二―五年の延安整風運動を起点とした毛沢東の指導のもとに一連の整風運動が展開されてきている。

四九年の革命以後、土地改革を背景として五一―三年の「三反・五反」―（三反―汚職、浪費、官僚主義の中国官界の悪習一掃、五反―官僚と結託する悪徳商人の五悪）の旗をかげ、農民の意識改造を通じた「農業協同化」運動。（五三年、スターリン型重工業偏向路線の第二次経済建設五ヵ年計画が施行され「資本主義」から「社会主義」に移ったといいうる）

五六年の私有企業の国有化、公私合営化、手工業の組織化運動。（この五六年ブルシチョフによる「スターリン批判」に端を発した、いわゆる"雪どけ"状況と、ハンガリー革命の状況のもとでの「百花斉放、百家争鳴」運動の中断。これ以降の反右派闘争。）

五六年の「スターリン批判」に端を発した、いわゆる"雪どけ"状況と、ハンガリー革命の状況のもとでの「百花斉放、百家争鳴」運動の中断。これ以降の反右派闘争。

資本の収奪ではなく、せいぜい資本との合弁を「平和的」に行なう「国有」を利用していかに「国家」を利用していかに「国家資本主義」の刻印のもと農奴・奴隷の生産力をあげるか、との問題提起は「二国の神で社会主義革命をやりぬく」と「国的規模で社会主義建設の一国是化が一国的なものの固着化と泥沼化を深めるとともに、米中の緊張化は国際的に反映している。

フランス帝国主義は「東南アジア中立化構想」を掲げベトナム和平への介入政策であり、日本においては政府・支配階級にゆられる「厳しい国際情勢に対処する」として、国防体制強化としての第三次防衛計画、「アジアの平和」の義務と称した原子力潜水艦につぐ原子力空母エンタープライズ号の寄港への状況である。

南ベトナムグエン・カオ・ケ軍事政権は、一方におけるベトコンのゲリラ戦を主軸とした抵抗と他一方に国民の厭戦意識の昂揚下において、デタラメな選挙にもとづく政府としての「合法性」をまきちらし、国内の厭戦意識、戦争反対運動に武力的壊滅的軍事力を行使することによって「公的権力」の定着化をはかり、ジョンソン大統領は「文官の配置による民政の安定」と呼応し、米軍の大量の投入と残虐な軍事政策の施行を迫まり反共体制確立を挑している。

アメリカの深刻な経済不況の前ぶれと国内の新左翼勢力を中心とする平和運動の昂揚に対し「共産側」に対する強力な軍事圧力のもと兵力六十万を動員し、侵略政策を画策している。不気味な政治的経済的矛盾の拡大を内包しながらベトナム戦争の泥沼化と世論操作の「和平会議」の提唱の繰りかえしである。ソ連は「平和共存」論のもとに軍事物資援助を対抗させるというアメリカのベトナム侵略への軍事的対抗政策としてうち出されている。そしてジョンソン大統領の「無条件和平交渉の意志がある」という言明から、ウ・タント国連事務総長の「停戦・会議」さらにソ連、仏、英の「和平提案」種々の色あいを盛りこむ世界各国の「平和を望む声」は、「和平交渉」を提唱し繰りかえすのみである。

ベトナム戦争の泥沼化が深まり各国の緊急政策とともに相集的に危機の深刻化の中にあってテーブル―和平交渉―につかせることによってそれは一抹の生理的安堵以上のものとはいえず、反戦闘争の方向性へ開示されるものではない。

中国の現段階は歴史的に一定の岐路に立たされている。それは中国の内部的状況としてばかりでなくこれと外部的要因との密接な関係である。一九四九年の中国革命の性格―多々にしてニヒリズムにさらされる危機意識を志向するナロードニキ毛沢東主義と農民軍隊を主軸にし、民族ブルジョアジーを含めた民族民主統一戦線を実体とする沒階級的止揚するものの不明確没主体的スターリニズムであり、現在の権力闘争を新たに進行する局面はこのスターリニズムの第二革命への歴史的実験である。

―村井　弘二―

現実の体制をつきやぶれない平和運動

現実の政治＝経済体制がなんらかの力によって突き崩されない限りベトナム戦争を頂点とした世界の破壊と殺りやくは阻止することができないが現実は危機の直視をバネとし主体的に自己意欲を激化しえないところに、世界全面戦争に到るかもしれない現実の危機の深まりを怒りをもって受けとめなければ対処している。「なんとかベトナム戦争を止めさせたい」と労働者、人民、学生は考えている。これを背景とし六五年二月の北爆を契機に一定の昂揚を示した日本の反戦平和運動は現在どのような状況にあるのか。その運動はベトナム戦争阻止という労働者・学生の課題を真に実現する運動として展開しているのであろうか。

突入する以前から社、共が一世界史上初の反戦スト」などと宣伝しつつ日本労働運動だけでなく学生運動をさえぎりきこみ、流動化した10・21反戦ストは、スト体制の総くずれと「反戦」という「政治的性格」が姿を消しつつ、ストを経済主義をもって補完させるといったこの反戦ストの低調はまさしく既成の平和運動の無力ぶりを露呈した。《反戦》の課題は今日危機的状況に至っている。概括的状況は佐藤内閣の腐敗政治諸問題一般へ、議会での「黒い霧」追求なるにとりかえられており、社会党は議会主義政党の政、選挙での一票に解消させている。自称「前衛」政党日共も現在では「汚職と腐敗の佐藤内閣に代わって、清潔で民主的な議会政治を」スローガンの下にベトナム反戦はその政策の一環に封じこめられている。

「国会は政治的暴露の演壇」として腐敗政治の根拠を「自民党と米帝国主義者の結びつき、米日反動勢力」とつつ「議会政治の擁護」の議会主義政党への転落を「自主独立路線」のもとに宣言した。まさしく前衛政党の被爆の宣言である。労働者・学生へ議会主義の幻想をまきちらせ、運動させ、定着化させている。これでは現代の矛盾突破し、隋級支配と破壊するということではなく、転倒されている。

「自主独立路線」―日共式反米民族主義―への平和擁護運動の「転換」である。日共の昨年段階では、ベトナム戦争を①民族の権利の抑圧②中国封じこめから、ベトナム人民の民族独立、解放闘争の一環として日本における闘いを位置づけ「ベトナム人民への精神的・物質的支援を」とベトコンへ同情心を煽りたてていたが、転換の現在では「物質的、精神的支援は最低限の義務であり、真の支援はまさに日本の土の上でのたたかい」と修正をほどこし「スターリニズム一国社会主義」を側面から完全に復活させ完化して打ち出されている。

この内容は北ベトナム・ベトコンの"中共式反米民族解放闘争"の軍事的勝利をもって「ジュネーブ協定遵守」「民族の完全独立」「南北ベトナムの統一」という一国的規模での「平和的、政治的解決」へ、各国支配者層への闘争・民族主義）勢力」の反帝的反米平和民主的基盤拡大をもって補完させるこの平和擁護路線を「日本における支援」強化としたさされている。

毛・林派の中共指導部のベトナム戦争に対しての反米帝路線、すなわち人海戦術を根底とした武力闘争によるアメリカ帝国主義への対決として核実験が強行されるという武力的に把握されている。日共は「日本は米帝に従属していながらすぐれた資本主義であり平和的闘争を行なわれなければならない」と陳腐なもとに毛・林派の武力闘争を「極左」戦術として排除するとともに党内の「中共派」の追放が現象した。

そしてアメリカ帝国主義によるベトナム侵略に反対する現代修正主義をまきこまねばならないとし現代修正主義―ソ連の近代兵器を大量にベトナム戦争に投入しなければならないとしており、ベトナム戦争の泥沼化に拍車をかける。

ことがなく分析されている。

帝国主義圏と中・ソ連圏が、軍事力を背景とし、一国的規模の社会主義経済建設を防衛するため、共存を少しでも自己の支配圏に有利なように実現するべく泥沼化のベトナム戦争を、世界体制保持者切を抑圧と抹殺から劉・鄧派（実権派）への攻撃、打倒。世界革命・経済政策に関する対立が、八月から十二月の段階において軍の武装を背景とした紅衛兵を掌握するもの「プロレタリア革命造反派」と、党組織を掌握する劉・鄧派（実権派）との矣鋭な対立は権力奪取闘争のかたちをとって、全国的な規模における党の諸機関各地文化大革命の進行過程にある。

これに対して劉、鄧派は、軍近代化を背景とした反米革命と国際統一行動の推進、大躍進政策と物質的刺激による増産、利潤導入政策の採用をもって労働生産力性向上政策を対抗している。このような根底的対立の次第に明確化され、文化大革命が文革路線風運動→党内闘争、権力奪取闘争と展開されている。

「暗殺闘争激化」論を軸に毛沢東物神化と造反派の武力的権力奪取闘争は「革命的」一様相がでているが、根底は「国の社会的生産力の増進のために、固有化された生産手段と出来高払いノルマ制で労働者生産管理方式を掲げている。

農民共同体を現化するナロードニキ主義的毛沢東主義の「第二革命」と位置付け、劉・鄧派（実権派）による労働者の経済的要求のくみあげに対して「経済主義」「ブルジョア反動路線」と断罪する。

切を抑圧と抹殺から劉・鄧派（実権派）への攻撃、打倒。世界革命・経済政策に関する対立が、八月から十二月の段階において軍の武装を背景とした紅衛兵を掌握するもの「プロレタリア革命造反派」と、党組織を掌握する劉・鄧派（実権派）との矣鋭な対立は権力奪取闘争のかたちをとって、全国的な規模における党の諸機関各地文化大革命の進行過程にある。

これに対して劉、鄧派は、軍近代化を背景とした反米革命と国際統一行動の推進、大躍進政策と物質的刺激による増産、利潤導入政策の採用をもって労働生産力性向上政策を対抗している。このような根底的対立の次第に明確化され、文化大革命が文革路線風運動→党内闘争、権力奪取闘争と展開されている。

「暗殺闘争激化」論を軸に毛沢東物神化と造反派の武力的権力奪取闘争は「革命的」一様相がでているが、根底は「国の社会的生産力の増進のために、固有化された生産手段と出来高払いノルマ制で労働生産管理方式を掲げている。

農民共同体を現化するナロードニキ主義的毛沢東主義の「第二革命」と位置付け、劉・鄧派（実権派）による労働者の経済的要求のくみあげに対して「経済主義」「ブルジョア反動路線」と断罪する。

六四年十月十四日ロスターリン―フルシチョフの簒奪として、クレムリン宮殿革命によりフルシネフ・コスイギンの新指導体制に対し中国核実験第一回の成功であり、現代修正主義と断罪した中共は「農村は都市を包囲する」という後進国植民地における反米民族解放闘争理論はアジア・アフリカ・ラテンアメリカを「中間地帯」と位置付け「暗殺闘争和にならない暗殺闘争」としての社会主義への平和移行」とするソ連に激しく対抗した。

しかし六五年六月のアルジェリアのクーデタ、A・A会議の延期九月のインドネシアクーデタ・三〇の矣敗、PKIの没滅は、決定的な敗北の頂点に至り六六年二月ガーナのクーデタ、日共の「自主独立」路線の中共路線からの離反、中国派を自認とし、さらに三月ソ連共産党第二三回大会への北爆離北ベトナム・ベトコンの参加、中ソ抗争のもとでのベトナム戦争の泥沼化（暗黒）状態にあり、後退化孤立化の状況にある。中共指導部においても反米路線内の対立が、労働者知識人、ソ連式官僚化派と農民を主体とした人民ゲリラ戦争、根拠地革命派の抗争が、この文化大革命の進行過程にある。

帝国主義における世界革命との分断された一国社会主義革命、植民地解放闘争それ自体が内包している限界、矛盾が中国の現段階の限界性として生産力の発展の抗争が世界革命の分断された中で権力奪取闘争となっているといえる。

この限界性の認識をもって歴史の過渡性の模索を考察しなければならないといえる。

反戦の課題

一国社会主義の限界性、抗争

〔毛沢東主義の「第二革命」の実験〕

歴史の過渡性の模索を

米世界革命の根底的対立

北京市長・党中央政治局員の彭真が「三家村」グループの黒幕として六月毛・林派は政治的裁判を失脚させられ、彭真失脚によって反毛沢東の官僚主義的一彭真路線を打倒の方向をとるとして、中共指導部内にはなお、現代革命路線の根底的なぬきさしならぬ対立を露呈した。即ち「現代修正主義に反対し現代教条主義に反対する」彭真と日共の宮本らとの会談が、ベトナム戦争という主要な当面の闘争課題に、なぜ「修正主義者ソ連指導部を含んだ国際統一行動の展開」での一致をみたが、それとは他に建構された「共同コミュニケ」が毛沢東によって拒否されたという事実は、ソ連の「平和共存」二辺倒路線に対抗した中共の反米世界革命の実現手段と方法をめぐっての対立と分裂の顕在化の進行深化しているということを意味した。

彭真失脚にひき続いて「百花斉放・百家争鳴運動」のヘゲモニーを掌握し組織化され官僚主義の大衆運動が「被目立新」を掲げ「党内の一握りの資本主義の道を歩む実権派と、ブルジョア反動路線を堅持している極少分子の権力を奪え」と断罪しつつ毛沢東物神化「毛主席語録」―と大衆大量動員によって反毛沢東の官僚主義的一

卑俗な政治主義的〝前衛〟の喪失

日本において、この中国文化大革命に対して、自称「前衛」を自認「前衛」伝統を認めない自共は前衛の論理の喪失を露呈した。

「中国の内部問題であって、わが自共は前衛の矛盾の根源的に制禁しなければならない。

ソ連は、全人民共国家、国家組織を改造して、ソビエト、労働組合協同組合その他の勤労者の大衆組織を結合する社会的な共産主義的自治（ソ連「新領土」）すなわちプロレタリア独裁国家の「全人民の国家」への転化さらに商品生産の繁栄に対し中共は、プロレタリア独裁と社会主義国内部の社会主義（的要素）と資本主義（的要素）との二つの道のたたかい」（中共の「総路線」）ブルジョア反動と断罪し、全人民所有制と集団所有制と社会主義社会の過渡期における社会主義の「第二革命」の実験は、中国路線からの脱皮であって、労働力の商品化―生産力の資本的性質を止揚しない。故にこの根底なものへの検討を現在的根源的に制禁しなければならない。

日本において、この中国文化大革命に対して、自称「前衛」伝統を認めない自共は前衛の論理の喪失を露呈した。

「中国の内部問題であって、わが自共は前衛の矛盾の根源的に制禁しなければならない。

ソ連は、全人民共国家、国家組織を改造して、ソビエト、労働組合協同組合その他の勤労者の大衆組織を結合する社会的な共産主義的自治（ソ連「新領土」）すなわちプロレタリア独裁国家の「全人民の国家」への転化さらに商品生産の繁栄に対し中共は、プロレタリア独裁と社会主義国内部の社会主義（的要素）と資本主義（的要素）との二つの道のたたかい」（中共の「総路線」）ブルジョア反動と断罪し、全人民所有制と集団所有制と社会主義社会の過渡期における社会主義の「第二革命」の実験は、中国路線からの脱皮であって、労働力の商品化―生産力の資本的性質を止揚しない。故にこの根底なものへの検討を現在的根源的に制禁しなければならない。

国社会主義の中ソ対立

中ソ対立の歴史的根源として、五六年の「スターリン批判」とハンガリア革命、五七年の「モスクワ宣言」六〇年の「西明」をめぐっての中ソのイデオロギー的対立の進行過程である。明確化するのは六二年十月のキューバ危機をめぐってであり、決定的に中ソが決裂している。

ソ連は、全人民共国家、国家組織の崩壊、ソビエト、労働組合協同組合その他の勤労者の大衆組織の崩壊、根拠地革命派の抗争が、この文化大革命の進行過程にある。

帝国主義における世界革命との分断された一国社会主義革命、植民地解放闘争それ自体が内包している限界、矛盾が中国の現段階の限界性として生産力の発展の抗争が世界革命の分断された中で権力奪取闘争となっているといえる。

この限界性の認識をもって歴史の過渡性の模索を考察しなければならないといえる。

代行委員長 選管選出

選挙告示十四日か

さる二月二日自治委員会が開催され、学友会執行委員長代行に横畠正秀（商四・所属体育会）が決定した。

引き続いて昭和四十二年度選挙管理委員を選出した。

（委員長）板倉宏（経四・体育）

（副委員長）橋本正彦（文四・文化）西原一成（文二・体）（書記長）横畠正秀（商四・体）（副書記長）沢利一（法二・体）満田正三（経三・文）（委員）原哲三（法三・少捉）若林信祐（商二・体）竹内里衛（文二・体）兼田新（法二・体）服部哲郎（経二・体）横尾哲夫（商二・体捉）の構成メンバーである。

選挙告示は四月十四日（金）に行ない、選挙を四月二十一日（金）に行なう予定である。

昨年は選挙が四月二十五日から休日をはさんで巧妙に行なわれており今年は非常に時期早尚に行なう予定である。

今年は大学の危機と生活の危機―特に「学費値上げ」の動向下にあって行なわれる選挙であるが、没主体的なもとに危機的情況を分析化する現実がうけられる。われわれはこの現実を主体的に把握して行く方向をとりつつなにが必要とするのかを問題化して自から学友会を利用する方向しかなかれは現実の危機に抗することはできず、みすぼらしい、どうしようもない情況に傾斜させてしまうであろう。

教科書は全て生協で!!
教科書販売―有隣館
店舗では専門書、学用品を充実
関西大学生活協同組合天六支部

オトコがえらぶ！　オトコが決める！　ナイスタイプ整髪料
丹頂マイコーム〈スペシャル〉
●ミクロ乳化整髪料
●100g 300円　●60g 200円
新発売
❶ベタテカしないでパラつかない
❷ドライヤー効果をフル発揮
❸ハンディなポリ・チューブ入り
❹毛の質に関係なし
❺洗髪は1回で完了
❻男らしい香り
丹頂株式会社

戦後民主主義の申し子甘ッタレ子に対する強烈なアジテェイション

大島渚「日本春歌考」

受験生の慰撫への抵抗としての春歌という図式を観てみた。

大島が受験生に目をつけた。学生よりも受験生に期待を懸けてみたのかしら。（十八歳未満が解禁になった）

いい加減な学生生活に慣れ切ってしまった学生大衆よりも、マスコミにも騒がれ甘やかされ続けてきた受験生に、突然、ひとりでたたかいのヨサホイのホイ、ひとりぼっちのホイ、親の許しを得ずにゃならぬホイホイ、と聞かせ。性欲的にこそだったが、あかんたれの彼らにとって行進曲となってくれた。ひとりでたたかいのヨサホイのホイで、女の衣服を一枚つつはがして行くとこで洗練されたダルシスを覚える（ひとりから日本の神話的歴史の謂いが聞こえるとこるは日本はこれ程の重荷なのか）

しかし本当は春歌は行進曲じゃなかった。伊丹一三扮する大学先生は「春歌は民衆の抑圧されたエネルギーの発露である」という。自衛行為だった。その自衛行為がどうして女を犯さしめる行進曲となり得たのか。

大島のギシギシとした映画は今回もまたわめいておりました（ギシギシとはようするにギシギシなんで、すんなりとじゃならないこと。）そして不思議に思終った後に、はっきりと何もなかってもそれで終ってしまわないのは、大島のいう映画を創る以前内面の問題と関係している。

大学の映研に毛の生えた程度の映画製作法だろうがテクニックの上手下手なんて問題じゃねえ、と大島氏は言をしめてかからないとやっぱりBBはBBの重力圏か

ら、やがて学生大衆から市民予備隊、小市民へのルートを行く受験生に向って、ひとりでたたかいのヨサホイのホイを謳歌も音程もくそくらえと歌い出した大竹先生に自己暴露するように彼らの世代がきびしくきびしく痛いくらい出ている。われわれがやれ反抗期のなんのと甘やかされて育った時、大島らは、敢戦にあい、時の教師ども大人どもが無責任にも今まで全く違った言い方をした時期を経てきた。その世代に今の世の受験生どもは、甘やかされマス化されてきた。そいつらに済のおっさんはたまらなかったんだろう。

大島が助監督時代、田舎出身のふぬけ大学生を観て、「あんなの学生じゃないの」と思ったという。しかし、現実にも、そんな学生が自分の目の前で発生しようとしている。自分達の学生時代はそんなじゃなかった。もどかしくてたまらないのである。

そして一体最後に469番の美人の受験生が衣服を全部とられた後で、荒木一郎に首をしめられながら、失神寸前にいう台詞「真実」まで、彼等はどれ程意識的になれたのだろうか。すくなくも鶴岡小女を犯した、"春歌・ホフオ"反戦フォークソング大会のエエコのポンポン供をなぐるこよしは持っていたし、虚しい講演をはく大竹の愛人谷川静子も否定することが出来た。そして彼等も469番と、隠原眉子を春歌を歌いながら衣服を変るがわるはいで行きました。

上では谷川静子が虚しく空しく、神武さんらのお話を力演してくださいました。（座頭）